

交通事故はなぜ なくなるのか

リスクを
とる心

第7回

リスクは楽しい？

立教大学現代心理学部教授 芳賀 繁

「人びとはリスクをゼロにしようとはせず、リスクをとることによって得られる利益と、リスクが実体化して事故や損害が生じる可能性と、その被害を秤にかけて、「最適なリスク」を目標として設定する」というのがリスクホメオスタシス理論の主張です。だから、安全対策でリスクを減らしても、人間が従前のリスクのまま利益を高めようとして行動をリスクな方向に変化させるというわけです。しかし、人間は時として、得られる利益にとうてい見合わないような危険をおかすことがあります。そのわけを考えてみましょう。

進んでリスクをとる理由

一般に、リスクをとるかリスクを避けるかを決定するプロセスは図1のように表わされます。すなわち、

- 最初にリスクの存在に気づく。
- 次にそのリスクの大きさ（被害を受ける可能性と被害の大きさ）を見積もる。
- そして最後にそのリスクをとるか避けるかを決める。

この、「リスク知覚」、「リスク評価」、「意思決定」の3段階すべてに、状況、年齢、性別、経験、性格などの要因が影響を及ぼします。

リスクの存在に気づかなければリスクを避け

ようとはしません。1999年に東海村の核燃料加工施設で起きた臨界事故では、濃度の高いウラン溶液を一つの容器にたくさん集めると核分裂の連鎖反応が起きる可能性があることを、作業員たちが知らなかったようです。容器の形も、決められた細長い筒状の容器なら臨界が起これにくかったのに、直径の大きな臨界が起きやすい形の容器を使ってしまいました。そのほうが能率がよいと判断したからです。能率のよい作業方法に変更することを決める際、その作業方法に伴う大きなリスクに気づかなかったために起きた悲劇でした。リスク知覚には知識と経験が必要な場合があるのです。

リスクの存在に気づいた後は、そのリスクの大きさを評価するプロセスが続きます。リスクの大きさは、被害が起こる確率と被害の程度の積と定義されることもありますが、主観的なり

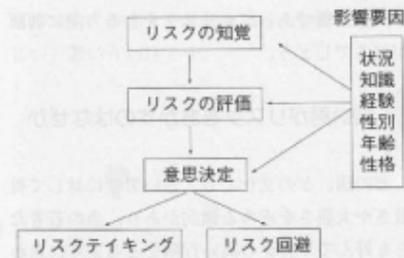


図1 リスクテイキングのプロセス



「若者の危険行動」 はなぜおこるのか

リスクの大きさは必ずしもこのような客観的な値に一致しません。未知なるリスクや恐怖を伴うリスクは高めに評価されやすく、慣れや成功体験によってリスクが低めに評価されることがあります。ここでも知識と経験が影響するということです。さらに、女性は男性よりもリスクを低めに見積もり、若者は中高年よりもリスクを低く見積もる傾向があります。

リスクを評価したうえで、そのリスクをとるか避けるかを判断します。通常はリスクが大きいと評価すれば避け、小さいと判断すれば避けない、あるいは積極的にとります。しかし、リスクをおかして得られる成果・報酬の魅力が大きければ多少のリスクはとるでしょうし、成果・報酬がリスクに見合わないと思えばたとえ小さなリスクでも避けるでしょう。また、リスクを避けなくても自分の技術・能力をもってすれば目標を達成できる、あるいは事故を避けられるという自信がある場合はリスクをとりにいきます。リスクをとるか避けるかの判断に影響する因子には、本人の価値観、周囲の人や文化の評価もあります。「男なら勇敢に立ち向かうべきだ」「失敗を恐れず挑戦するのはカッコイイ」と、本人や周囲が思っていたら、同程度のリスク評価であってもリスクをとる方向に判断が偏るでしょう。

若い男がリスクをおかすのはなぜか

どの国、どの文化でも、若い男性に対して勇敢さや大胆さを求める傾向があり、当の若者たちも好んでリスクの高い行動をとるように思われます。交通事故に関しても若年男性の事故率

は高く、速度超過や暴走行為で事故を起こすドライバーの数が多のが特徴です。「なんでこんなバカなことをするの?」と言いたくなるようなことをして命を落とすのはたいてい男子です。たとえば…

札幌市内の無人駅で下校途中の男子高校生3人がふざけて貨物列車の屋根に上り、2万ボルトの架線に触れて感電し、大やけど(1999年7月)。北九州市では走行中の列車の窓から屋根に上ろうとした男子高校生が線路に転落し、別の列車にひかれて死亡(2006年6月)。山梨県笛吹市の小学校で、昼休みに10人の6年生男子が施設された体育館にトイレの窓から入り、そのうち一人が館内にあった机などを使って中2階に上がった後、壁に備え付けられたはしごで天井裏に上がったところ、天井を踏み抜いて床に転落して重体(2008年5月)。東京都杉並区の小学校で5年生男子が校舎屋上の明りどりの窓に乗り、アクリルのドームとその下のガラス窓を突き破って1階の床に転落して死亡(2008年6月)。高知県の四万十川で修学旅行中の男子高校生4人が橋から飛び込み、そのうち一人が水死(2008年8月)。

亡くなった人やご家族には気の毒ですが、まったくもって男子はアホです。私も男子ですから、若いころは馬鹿なことをいっぱいしました。鉛筆に針金を結びつけて電気のコセントに接触させて火花を散らせて喜んだり、粘土をこねて作ったかめに灯油を満たして火にかけたり、薄氷の張った浅い用水路の上を歩いてみたり…

若い男が危険な行動を好むのは、進化行動学によって説明されています。すなわち、リスクをおかして未知なる土地へ冒険の旅に出ること

マモリの輝き 5

で、新しい肥沃な土地を手に入れたり、(女性を手に入れることで)新しい遺伝子を手に入れることができるからです。多くの若者がそのために命を落としても、一人が英雄となって領土を獲得すれば、彼と彼の部族(つまり彼と共通の遺伝子を持つ人びと)の子孫は繁栄するのです。戦争でも多くの若者が死にますが、勝てば生き残った仲間が多くの子孫を残せます。しかし、仲間のためだからと理性的に考えて、自分の命を危険にさらすわけではありません。冒険や戦いが好きなのです。

男性読者の皆さんは「いやそんなことはない、私は若いころから冒険や争いは嫌いだった」と言うかもしれませんが、ある割合の男性は、少なくとも若いころ、危ないことを好んで行います。そのような遺伝子、昔の英雄から受け継いだ遺伝子が確かに私たちの遺伝子プールに一定割合で存在するはずです。もちろん、そのような遺伝子を持っていても、現代の平和な社会にちゃんと適応していれば、親や家族を悲しませるような行動や、他人に危害を加えるような行動にブレーキをかけているはずですが、でも、もしかしたら、あなたの中にも英雄の遺伝子が隠れているかもしれませんよ。

リスクは楽しい

リスクをとることが快感となることについては生理学的根拠もあります。

多く人は新しいこと、新しいものが好きです。慣れ親しんだいつもおなじみの刺激(人や食物や映画)や活動は、安心感はあっても物足りません。同じことを何度も繰り返すのは退屈です。新しい刺激は自分の気にかかるかどうか分からない、新しい活動はうまくできるかどうか分からない、そういう不確実性、すなわちリスクがあります。これが実は楽しいのです。ワクワクするのです。遊園地のジェットコースターできゃーきゃー言うのも楽しいし、どっちが勝つか分からないスポーツ観戦も楽しい(結果を知っていたら面白くないでしょう?)。ホラー映画もギャンブルも根強い人気があります。

リスクに直面すると覚醒水準が上がり、そのため脳内でカテコールアミン(アドレナリンの基になる物質)が分泌され、それが快感につながります。さらに、リスクを乗り切って覚醒が下がると、エンドルフィン(「脳内麻薬」とも呼ばれる物質)が放出されて、再び快感を感じるのです。つまり、リスクは「一粒で二度美味しい」というわけです。